

姜生著、三浦國雄譯『道教と科學技術』

土 屋 昌 明

本書は『中國道教科學技術史 漢魏兩晉卷』（二〇〇二年、科學出版社）の日本語譯である。この原著は、中國語で八百ページを超える大著であり、全編の各部分で複數の執筆者によつて分擔執筆されている。譯者によれば、日本での出版可能性を優先して「編譯」したが、原著の七割方は翻譯し得ており、原著のエッセンスは十分譯出し得たと自負するところもあるとのことである。當初、書評の豫定が本學會理事會で組上にあがつたときは、原著に對する書評であつたが、その後、譯書が出版されたので、本書評は譯書を扱うこととする。譯書にしても、

刊行されてすでに六年が経つてしまった。書評の執筆者が變更になり、諸事情によつて遅延してしまった。まず著者と譯者にお詫び申し上げたい。

『中國道教科學技術史』は、本冊「漢魏兩晉卷」のほか、「南北朝隋唐五代卷」が二〇一〇年に出版された。「宋元明清卷」は二〇一八年出版の豫定と著者まえがきにあるが、二〇二三年現在、未出版のようである。本シリーズは、ジョセフ・ニードム編『中國の科學と文明』（邦譯は第一期全十一卷、思索社、一九七四～一九八一年）を意識して企畫されたようである。しかし、本書は二一

ダムの本の補充を企てたのではなく、獨自の見解を展開し、ニーダムを乗り超えようとする意欲がある。そう譯者が指摘するのは首肯できる。譯者の觀察によれば、著者の「前景にニーダムの巨著が屹立しているのは事實であるが、遠景に現代中國社會の〈科技信仰〉が横たわっている」という。というのは、本書の成立は、中國の國家重點プロジェクトによるものであり、科學技術に對する國家的な重視を反映しているからである。國家的な科學技術への信奉について、譯者は「科學技術の負の側面に對する顧慮があるのかどうか疑問に思うこともあり、また〈人間〉が置き去りにされはしないかという不安を感じることもある」と述べている。あたかも日本の高度經濟成長期の產學協同への批判を想起させるものがある。譯者のこの感想は、本書そのものに對してではないが、現今の中國において、國家資金にもとづいた大型出版活動を進める著者の學術的危うさを心配していると受け取れる。

さて、本書評では、譯者のいう「ニーダムを乗り越え

ようとする」ところから本書の紹介を試みたい。科學というタームを考察の軸にする以上、なにをもつて科學とかが問題となる。ニーダムは、ルネッサンス期に「數學の假説が自然界に應用され、問題を推論する時に數學が應用された」ことをもつて近代科學が成立したとみる。したがって、西歐史における科學技術史は、ルネッサンス以前の長い歴史に、近代科學に流れこむ支流を見いだしたり、結局はルネッサンスまで行きつかなかったが、その可能性のあつた事象をとりあげたりすることになる。思うに、淺薄な理解だが、ニーダムの中國史における探索方法は、これと同様だったのではないだろうか。ニーダムが道教の哲學について述べた文を譯者解説が引用しているが、そこでは、道教にみえる「科學技術」を「科學的態度」(○○學) 起こり「科學的洞察」といつている。つまり、もし相應の歴史的發展を遂げていたら、近代科學に至っていたかもしれない事例を取り上げているのである。しかし、中國史では、そもそも近代科學は生まれなかったのだから、近代科學に

至る路線は設定し得ない。それゆえニードムの課題は、中國では科學的態度と技術が高度に發展したのに、なぜ近代科學に至らなかつたのか、という問題になる。この點は、譯者解説六頁に詳しく、それによれば、ニードムは次のように考えたという。外在的な要因として、地理的、水利的、社會的、經濟的の4つをあげ、內在的要因として、近代科學成立に必須の條件が中國の思想になかつたためだと。

本書の著者（特に序説）の狙いは、このニードムの考察を乗り越えることにあつた。そのために著者は、まず近代科學という概念の枠組みから自由になろうとする。著者によれば、科學は「自己の能力を有効に延伸させ増強させる知識のシステム」だという（六頁）。人間は、自己の限界を超えて生命を發展させるために外部世界からエネルギーを奪い取ってくる能力を準備する。この能力に著者は「攫能^{かくのう}」という語を與えた。この語について譯者は、日本語に置き換えるのが難しいので原語のまま使っている。

この語はやや理解しにくいが、私は、譯者の解説も參考にしつつ、次のような意味に理解した。この考え方は、ニードムが近代科學をゴールとして過去に戻って歴史をたどりなおしたのと反對に、人間の生活の出發點から科學技術の歴史をとらえようとしている。人間は自我意識を持って以來、いかにすればより高いレベルで生存し發展しうるか、という課題を解決していく。たとえばサルは、檻の外のバナナを採るために木の枝を使うことができるが、さらに木の枝の先に引つ掛かりを作れば、もっと採集の効率を上げることができる。それが技術への第一歩となるが、サルにはまだそれはできない。そうした技術が効率を上げていくには、客觀的判斷と知識の集積が必要であり、そのような指向性を持った能力が「攫能」である。それによつて、自己の外部の力を取り込んで自己のために應用できるようにする知識が科學へと發展した。したがって、この概念によれば、西歐の「科學」（近代科學以前の自然學）と中國のそれとのあいだに區別はない。しかし、この「攫能」には指向性があるか

ら、文化的環境によって、西歐と中國では相違が生じた。

著者によれば、中國史において、この「攫能」が最も強力なのは道家・道教であった。というのは、道家・道教は、自己の生命の保存、長生不死を達成することが目的であり、この目的は人間にとつて究極的課題だからである。ここには、西歐のような宗教と科學の相克はなく、宗教と科學の相互浸潤が起こった。道家・道教の「攫能」は、現實の肉體存在をいかにして高いレベルに發展させて長生不死を達成するか、という指向性を探求した。換言すれば、道家・道教には「科學」（自然學）の發展をもたらす論理が内在していたのだ。以上のように枠組みを立てることで、道家・道教の文獻から科學的な思考や技術を収集し検討する意義づけが明確になる。

その一方で、中國で近代科學が形成されなかった理由も、道家・道教の「攫能」にあった。道教の「攫能」が、唐代を境にして、肉體の外部の力を取り込む指向から、肉體の内部に資源を求める指向に變化した。つまり、外丹から内丹へ變化した。外部の存在に對する觀察や探求

は必要性を減退し、つまり「攫能」の效率は下がった。

この原因は、道家・道教に内在的であった。それは、無の思想を根本とした點、「魚を得て杓を忘る」、つまり目的を得るための道具や技術は相對的なものにすぎないという思想にあった。さらには、隋唐時代に佛教の影響を受けて、道性論など、人間存在の内部への指向が強まった。このような「攫能」効率の減少は、全眞教を経由して、宋明理學で決定的になった。これが、中國で近代科學が成立しなかった内的原因である。これらの問題は、序説の第三章「道教と科學技術の同根性」以下、「道教科學思想の變容…外丹から内丹へ」「内在化の進展…全眞教から宋明理學へ」に縷々論述されている。

本書は、このような理論的枠組みの下に、いろいろな道教文獻にみられる「攫能」の事例を収集解説していく。當然ながら、外丹すなわち化學が最重要であり、藥學と醫學がそれに續く。さらに、道教が重視した天文學、地理學、物理學、建築學、飛行術などが例證される。譯者も書いているが、道教文獻にこれほど多くの科學的洞察

があつたかと驚かされる。この點もニーダムを乗り越える點である。本書の達成は、中國の研究者たちの道教文獻整理と電子化に對する數十年の努力があつたればこそであり、ニーダムの時代には困難だった。

以下、翻譯について述べたい。まず、この大部の著作を獨力で翻譯された譯者の努力と成果の大きさに喝采を送りたい。譯文は全體で六百頁を超えており、一日に一ページ分の翻譯をしても二年かかる。現實問題、そんなペースで翻譯できるはずはなく、その數倍の時間がかつたはずだ。たいへんな營爲である。譯者はあとがきで「一日中机の前に座つてやつと一ページ進捗、というような日も少なくなかった」と語っている。どれほどの努力をかけて翻譯を進めたか、もって知るべしである。しかも譯者は、定年退職して數年後、二〇一二年に四川に渡つてから、この仕事を續けていた。普通の學者には思いもよらない冒険であり活躍である。そして、自身より二まわりも歳下の著者の學問に對して、敬意をもつて謙虛に學ぶ姿勢が感じられる。このような譯者の翻譯態

度に、心からの尊敬を表したい。

次に強調したいのは、引用資料がすべて現代日本語ないし訓讀に翻譯されていることである。引用資料には、難讀の道教文獻が多い。私など不學者には書名すら聞いたことのない文獻があり、しかも長文で引用されている特に、外丹系の文獻、『太平經』や醫藥書の原文が翻譯されているのは、非常に有益である。原書では、こういった難讀の文獻がただ引用して示してあるだけで、中國の讀者でも容易に理解できないはずだ。日本の讀者は原著を讀む中國の讀者よりずっと幸せである。

さらに、この仕事に對する譯者のパッションである。譯者は、著者より遠くを見つめており、その遠景には中國文化の現代における可能性が横たわっているのではないだろうか。私はそれに共鳴を覺えた。ニーダムの著書が一九七〇年代に翻譯されたころ、近代科學の問題性が討論されていた。核戦争の恐怖、ベトナム戦争での枯葉劑使用、水俣病など、科學技術がコントロールできない狀況になっていた。西歐の生んだ近代科學に對する疑

念と反感は、アンチ科學の運動も生じさせた。當時のこうした動向で、中國の科學と文明という視點が、近代科學を相對化させる魅力を持っていたのだ。ニーダムはこう語っている。「科學は人間に善をなしとげたと信じるが」科學の危険な發見物をコントロールすることは政治的、倫理的な問題であると認識しております。そしてこのところ、おそらく中國國民の特殊な天才が、來るべき時代の全世界に向けて影響を及ぼすことのできる領域なのであります」(『西洋の反科學についての東洋からの視座』一九七四年、井上英明譯『理解の鑄型』法政大學出版局、一九九二年、四〇一頁)。この話を、當時にありがちな、新たな文化の革命、米ソ冷戦に對する第三項、西歐近代の超克といったイメージによる中國幻想だと後知恵で斷じるのは簡單だ。しかし、それで終わりにするには、中國文化の奥は深すぎ、あの當時はみえていなかったことが多すぎた。現在の中國の統治者層が科學技術を宣信し、人間性をないがしろにする可能性があるからこそ、中國文化を再考する必要があるだろう。

科學的言説が眞理の絶對的基準だとみなされる私たちの時代に、科學は權力を持つ者たちの利益のためのプロパガンダに利用されている。ニーダムは、科學をコントロールする倫理と政治を中國の國民(當時なら人民と譯した)にみようとしたり。そのうちの「倫理」について彼は、おのれが心血を注いで研究した中國の科學と文明にみだしていただろう。その點が、もしかしら譯者の翻譯(特に原文の翻譯)に對するパッションの遠景にあったのではなからうか。

ニーダムがいった二つの課題は、いまだ現代的意義を持つている。たとえば、フランスの科學哲學者ブルーノ・ラトゥールBruno Latourがcomposerという言葉で強調するのは、正しい科學技術と間違った科學技術を分けて構成する能力のことである。このような科學概念の再考に裨益できるような讀みを本書は求めている。

(A5判、六八〇頁、二〇一七年七月、
東方書店、六千五百圓(税別))